

## 北村正利さん追悼文集

### 北村正利さん

古在由秀 (元 国立天文台長)

北村正利さんは近年体調が優れず、一人暮らしながら身内の方々の手厚い看護のもとにあった。しかし、残念ながら2012年7月13日早朝に亡くなった。

北村さんは、1926年1月に高知県南国市で生まれ、一時は東京に居られたそうだが高知に戻られ、高知県立高知城東中学、高知高等学校を経て、1951年に東京大学理学部天文学科を卒業された。東大天文学科で、同時に入学した5人が、3年後にそろって卒業した最初のクラスと言われている。その5人は11年前、卒業後50周年を祝ったが、その後高橋 清さんが亡くなり、現在では辻内順平、中山 茂両氏と筆者の3名になってしまった。

北村さんは大学卒業後直に、東京大学東京天文台に助手として採用され、口径65 cm屈折望遠鏡に当時最新鋭の光電測光装置を取り付け、古畑正秋先生とともに、小惑星の色指数を決める観測を始めた。

その後、近接連星の光電観測に力を入れるようになり、観測データから連星の物理的性質や軌道を求める研究でも、「北村の方法」として知られるようになったプログラムで、連星の物理パラメーターを求める研究に力を注ぐようになった。古畑先生が教授となって開設された東京天文台測光部では、北村さんは有力なメンバーだった。

北村さんは1960年から2年間マンチェスター大学に滞在され、同じ分野の専門家であったコパール博士のもとで、近接連星の研究に磨きをかけ、1962年に助教授として帰朝した。

その後、東京大学大学院理学研究科で学生指導



北村正利氏

も担当するようになり、また、当時開設されたばかりの岡山天体物理観測所の188 cm反射望遠鏡や堂平観測所の91 cm望遠鏡を使つての観測にも着手した。

その後もマンチェスター大学などで、海外研究者との交流も盛んに行うようになり、国内では、大学院で指導した研究者をはじめとした同じ研究分野の人たちと毎年定例的に研究会を開催するようになり、それは現在でも続いているようだ。

北村さんは1963年から1965年まで、日本天文学会で会計理事をしていた。

1972年には教授に昇任したが、その間、京都大学、名古屋大学、新潟大学で非常勤講師を勤めている。また、東京大学では、図書行政商議委員会を長い間にわたって勤めていた。

1986年3月で東京大学を定年で退き、5月に東京大学名誉教授の称号を授けられた。

その後、外務省・国際協力事業団に協力して、日本政府のODAの基金により、発展途上国に口径50 cm望遠鏡やプラネタリウムを贈る事業に力をいれ、東南アジアや中米などの国々の天文学者には頼りにされていた。

北村さんは、東京天文台、その後を継いだ国立

天文台の名誉教授室を本拠としており、しばしばそこによく通っていた。

北村さんは、聡明な夫人に先立たれ、一人暮らしの生活に入り、上記のような仕事を続けていた。昨年春、われわれ天文の同級生の卒業60周

年の会を企画していたが、残念なことにその頃から体調を崩されたようである。われわれとしては、北村さんの回復を待っていたのだが、このような事態になってしまった。

## 北村正利さんを偲んで

小暮智一（京都大学名誉教授）

北村さんが逝去されたことは、7月15日の夜、インドネシアのバンバン・ヒダヤットさんからのメールで知り、深い悲しみにおそわれました。

北村さんとは長い付き合いがありました。主に国外での仕事上のことが多いのですが、時には奥さん同士も含めた和やかな思い出の場面もありました。

私が北村さんと親しくなったのは1981年にバンドンで開かれた第2回IAUアジア・太平洋地域会議の折でした。その頃、インドネシアと日本との研究交流事業が進んでいましたので、地域会議の折にアジア地域での天文学交流を中心にした討論集会が開かれたことがありました。その折、北村さんがアジアに限らず、発展途上国への援助と、研究、教育での国際交流の重要性を強調されていたのは印象的でした。当時はまだ国内でもこうした国際的視点に立つ人は多くありませんでした。

実際、その後の北村さんは外務省のODA文化無償による望遠鏡やプラネタリウムなどの供与を軸に、多くの国々との交流に力を注がれました。彼はそのためにアジアだけでなく、アフリカのモロッコや、南米のパラグアイ、コスタリカ、中近東から東ヨーロッパの国々まで、その足跡は世界にまたがっています。現地では天文関係者と交流を深めただけでなく、日本大使館やJICAオフィスを訪ねて文化交流の重要性を説かれたこともたびたびどか。私が日本大使との面談に同席したのは1回だけでしたが、彼が力説したのは



アーサー・クラーク研究所における天文関係者のランチタイム。

右端が北村さん、その左がサラジさん、左端にパドマシリ・ド・アルビスさん（1999年1月、筆者撮影）。

40 cm級望遠鏡の設置の必要性でした。彼の夢は世界の多くの経度帯に望遠鏡を置いて変光天体の連続的観測を実現するところにあったようです。こうした彼の努力は外務省にも高く評価され、ODAを通して望遠鏡やプラネタリウムを送られた国は25カ国に及んでいます。

北村さんの活動は国連でも注目されました。ウイーンに本部をもつ国連宇宙局は先進国間の宇宙開発や平和利用の宇宙法の調整などを任務としていますが、1982年の国連総会の決議によって、先進国と発展途上国との連絡をはかり、途上国の宇宙、天文分野での研究、教育を支援、促進するという任務が加わりました。そのため、宇宙局は1991年から毎年のようにワークショップ「基礎宇宙科学」を開催していますが、なかでも1996

年度はちょうど日本政府がスリランカに45 cm 反射望遠鏡を寄贈した年であり、ワークショップは寄贈式に合わせてコロンボで開催されました。宇宙局長のジャセントリヤーナ氏はスリランカ人ですが、局長は開会挨拶で北村さんの大きな功績を紹介されました。ワークショップ10周年の2001年には宇宙局情報誌に「発展途上国の天文学と宇宙科学の発展に果たした日本の貢献」という詳しい記事が掲載されましたが、北村さんの活動が中心になっています。また、2007年に三鷹の国立天文台でこのワークショップが開催された折も、北村さんを中心とする日本の貢献が強調されました。

こうした北村さんの活動に私もほんのわずかですが加わることができました。私にとって思い出に残るのはスリランカとの交流です。北村さんとともに何度かスリランカに渡り、望遠鏡の設置場所、研究者の養成、天文普及のあり方などで多くの関係者と議論しました。数年たって、ようやく光電測光器、分光器を装備した45 cm 反射鏡の供与が決まり、設置場所も国立アーサー・クラーク現代技術研究所となって、観測室をもつ研究所本

館の建設も進みました。それにあわせ担当者2名が日本の美星天文台に派遣され、天体観測の研修も行われました。この研究所の副所長パドマシリ・ド・アルビスさんは北村さんのアドバイスを基に施設の建設と運営に大きく寄与しています。

研究所と望遠鏡はいまも研究、教育普及の面でスリランカを中心施設になっており、日本で研修を受けたサラジ・グナセケラさんがその役割を担っています。サラジさんからは北村さんの逝去を悼むメールが私宛に寄せられました。

他の国についても、寄贈された天文設備はそれぞれの仕方で研究、教育、普及に役立てられているようです。こうした北村さんの地道な努力によって、2000年代に入るとアマチュア天文家の活躍、ネットを通じた国際交流の進展など、北村さんが1980年に描いていた夢はしだいに実を結んでいくようです。それを思えば北村さんの心も少しは休まるのではないのでしょうか。

これは北村さんの活動の一端ですが、紹介して彼を偲ぶ縁としました。北村さん、さようなら。安らかにお眠りください。

## 北村正利先生と連星研究

山崎篤磨 (防衛大学校名誉教授)

国立天文台名誉教授の北村正利先生が7月13日に亡くなられたと岡崎 彰さん(群馬大)から電話で知らされ、さまざまな思い出が蘇りました。享年86歳でした。

先生のご専門は「連星」の研究で、観測面では光学望遠鏡を用いた連星の測光観測(光度曲線)と分光観測(視線速度曲線、スペクトル線変化)、理論面では光度曲線解析法の開発や反射効果・重力減光の研究など多岐にわたりました。また、先生は連星研究分野で多くの若き研究者を育成指導してこられました。

ここ数年、先生は間質性肺炎に苦しんでおら

れ、2009年6月には先生から電話があり、

「中村泰久さん(福島大)から連星研究会で話をしてくれとの依頼を受けた。是非とも出席したいとは思いますが、最近の入退院の繰り返しで、今も病状がすぐれず出席できないと思う。来週病院に行くので主治医に聞いてみるが、おそらく駄目だと思う。中村さんにその旨伝えてくれないか。…」

という言葉が耳に残っています。今年3月に見舞いに伺ったときは、酸素吸入はしておられましたがお元気で、楽しく会話をしました。しかし、5月には病状が悪化して入院、7月に逝去されまし



京都にて。左より北村さん、バディングさん、コパールさん（1984年）。



エチオピアのアジスアベバにて（2004年）。

た。

現役時代の北村先生はたいへんお元気で、東京大学を卒業後東京天文台に入られ、精力的に連星研究を始められました。1953年より古畑先生たちと一緒に、65 cm屈折望遠鏡に当時最新鋭の1P21光電子増倍管を付けて、RZ Tauなどの食連星の光電測光観測を行いました。観測床が可動とはいえ鏡筒が11 mもある屈折望遠鏡を忙しく動かす測光観測は、観測者にはたいへんな労苦だったことでしょう。理論面では、近接連星の反射効果を数式を展開して論じられました。

これらの連星研究成果をイギリスのコパール教授が高く評価し、北村先生は1960年にマンチェスター大学に招かれ、2年間研鑽を積まれました。後に、滞英時の数々の思い出を、先生は懐かしさを込めて何度となく話されていました。

イギリスより帰国後、先生は、東京天文台岡山観測所の188 cmと91 cm反射望遠鏡および堂平観測所91 cm反射望遠鏡を用いて精力的な連星観測を、同天文台の清川正男さん、斎藤 衛さんら多くの方々、また大学院生の佐藤弘一さん、岡崎彰さん、金 斗煥さん、私、および連星研究の早坂 匡さん、バディングさんらと行いました。このほかにもJAPOAをはじめ多くの方が先生に

お世話になりました。思い出の一つ。堂平観測所で、休日なので食事は自炊ということで先生は酢豚を作ろうと思い立たれ、奥様にレシピを電話で教えてもらい、おいしそうな酢豚ができ上がりつつありましたが、最後の味付けで醤油大さじ1を玉杓子1と間違われ、醤油辛くて悲惨な結果に...

一方、理論面では、先生は光度曲線解析でフーリエ変換を応用して解を見いだす方法を考案し、1967年に大部な表を刊行しました。1970年には連星系のロッシュ座標について詳細に調べました。1983年から1993年にかけて中村泰久さんと近接連星の重力減光に関し実際の連星の値を用いて考察し、多くの論文を発表されました。

先生の暖かい心は発展途上国の天文学支援にも向けられ、先生のご尽力で、日本政府のODAで1986年から2004年までに19カ国もの国に望遠鏡やプラネタリウムが贈られました。

連星研究に大きな足跡を残された北村先生がご逝去されたことは、深い悲しみです。先生の還暦記念に私たちで記念論文集を作り、先生に装丁版を贈呈しました。その記念論文集が、葬儀のとき花に包まれた安らかなお顔の足元に置いてありました。

謹んで先生のご冥福をお祈りします。



## 北村正利氏の想い出

国際交流の場では私の“師”であり、尊敬すべき友人でもあった北村正利氏が亡くなられたとの知らせを受け、深い悲しみと喪失の想いを禁じ得ません。北村氏はインドネシアやフィリピン、パラグアイ等の諸国に日本の基金で測光望遠鏡を設置するなど、途上国の天文学界の科学振興に真摯に取り組んでくれました。そして、世界各地で変光星の振る舞いを観測すれば突発現象の特性についてもっと詳しい情報が得られるとの信念から、変光星の測光観測を熱心に勤めてくれました。そのようにすれば、大勢の若い研究者たちが突発現象を測光観測して自前のデータを取得できるようになり、観測的研究で天文学の発展に寄与できるようになる。北村氏はそのような的確な見通しをお持ちだったのです。

北村氏の科学的業績については、30年近く前の退官記念論文集に私が寄稿した回想の中で述べましたので、ここでは繰り返しません。しかし、ご退官後も、途上国の科学発展に貢献しようとの意志のみならず、既存の知識体系に新たな知見をご自身で加えていきたいとの意気込みをお持ちだと知り、科学者としての北村氏に改めて感服したものです。実際、1990年にソウルで開催された連星コロキウムでは、私自身、近接連星の質量交換について北村氏から直接に詳しいお話をお聞きする機会に恵まれました。

幾度も親しくお付き合いした中で、北村氏のお人柄を物語る忘れられない出来事があります。北村氏ご夫妻から三鷹の天文台官舎のご自宅に招待されたのですが、その時、インディラ・ガンディー女史がシーク教徒の警護官に暗殺されたと報じられました。皆で数分間の黙祷を捧げた後に、北村氏は、この悲劇を生んだ狂信的な偏狭さというものについてご自身の哲学を淡々と語ってくれました。その夜は、この嘆かわしい出来事の

## Bambang Hidayat (バンバン・ヒダヤット)

(インドネシア・ボスカ天文台 元台長, IAU 元副会長)

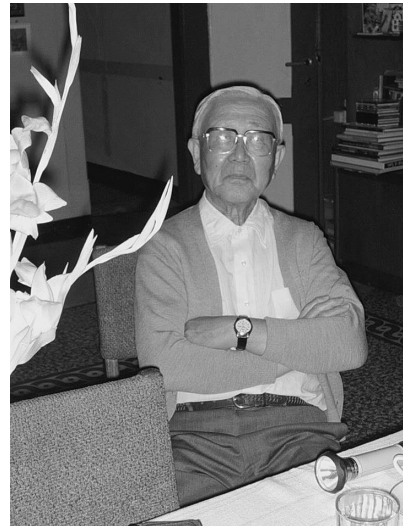


写真1 ヒダヤット氏宅にて (2005年).



写真2 ボスカ天文台 (インドネシア) に供与された 45 cm 反射望遠鏡. 学生たちと一緒に (1989年).



写真3 パラグアイでの講演（1998年）。

ために会話は途切れがちでしたが、穏やかな理性がその場を包み込んでいるように感じました。

北村氏には、私の日本滞在の際にたいへんお世話になっただけでなく、最後のインドネシアご訪問の際（2005年）にレンバンの我が家にお越しいただいたこと（写真1参照）にも感謝しています。そして、日本政府の基金を活用して多くの途上国の天文学を助成してくれた北村氏の熱意とご努力には感謝の言葉もありません。天文学の素晴らしさを堪能しながら天文学に貢献するという賢く楽しい指針を示してくれた北村氏は、数多くの友人や同僚、天文学への道を歩み続ける教え子たちの心の中に生き続けることでしょう。

（訳 岡崎 彰）

## 弔辞

**Hans J. Haubold** (ハンスJ.ハウボルト)

(国連、外宇宙業務事務所、ウィーン、オーストリアおよびインド、ケララ州、パラ、数理学センター)

E-mail: [hans.haubold@univiennea.org](mailto:hans.haubold@univiennea.org)

北村正利 1926–2012

北村正利教授が2012年7月13日に逝去された。

1989年以来、国連の外宇宙業務事務所 (the Office for Outer Space Affairs of the United Nations) に所属するとともに、後に国連基礎宇宙科学戦略 (UNBSSI: The United Nations Basic Space Science Initiative) と呼ばれることになる組織の生みの親の一人でもあった。北村教授は変光星の研究では国際的に知られた天文学者であり、国際天文連合の分野V (変光星) のメンバーであり、第42委員会 (近接連星) のメンバーでもあった。若い天文学者の教育、ことに発展途上国の天文学の発展のための国際的なレベルでの教育に若いころから興味をもった。

1982年以来、北村正利氏は、日本の著名天文学者の小グループのメンバーの一人として、ODA (Official Development Assistance) 協力プログラ

ムの枠組の下、日本政府の代理で、発展途上国の教育や研究を促進するために高精度の装置を多くの国に供与した。供与された装置は、大学レベルの反射望遠鏡や教育目的のプラネタリウムである。相手国の個人や政府との最初の接触から始めて、北村教授は、必要性などの調査、相手国政府関係者との話合い、交渉、そして望遠鏡あるいはプラネタリウムの設置場所や維持可能性など、あらゆることを独自に報酬なしで行った。教育プログラムの改善、研究結果の出版の世話や助言も入念に天文学者としてだけでなくまた個人としても行った。

1989年に、この努力が一定のレベルに達し、国連との協同が願わしくなった。すなわち有機的に働くことの示された援助システムを、もっと正式で直接的に政府や科学共同体を巻き込む形で世界レベルにすることである。これは、外宇宙の平



写真1 日本の国立天文台が主催者となった国際太陽物理年2007 (IHY2007) および基礎宇宙科学に関するUN/ESA/NASA/JAXAワークショップ (国立天文台・三鷹)。

和利用 (COPUOS) に関する国連総会の委員会構成国に日本が望遠鏡とプラネタリウムを供与するプログラムについて報告したときでもあった。北村教授の努力により、最終的に七つの望遠鏡、20個のプラネタリウムが発展途上国に供与された。このことは国連総会資料A/AC.105/902に記録されている。この書類には、2007年に日本の国立天文台が主催者となった国際太陽物理年2007 (IHY2007) および基礎宇宙科学に関するUN/ESA/NASA/JAXAワークショップの詳細も書かれている (写真参照)。日本がこのワークショップを主催することについては、1996年スリランカのアーサーC.クラークセンターでの天体望遠鏡設備の落成式の際にUNBSSIワークショップにおいて非公式に議論されていた。

北村教授は期間1991-2011における国連基礎

宇宙科学戦略 (UNBSSI) の毎年のすべてのワークショップの国際科学組織委員会の指導的メンバーであった。また、ワークショップで天文学の話題で講演し、すでに導入されたかこれから導入されるはずの望遠鏡設備やプラネタリウムへの支持を訴えた。発展途上国からの多数の天文学者は日本に招かれて公共天文台で訓練を受けた。逆に北村教授は発展途上国を訪ねて望遠鏡設備やプラネタリウムの設置場所を吟味した。これらは国連の支持および調整のもとで行われた。

北村正利氏は、天文学における教育・研究のために国際協力を推進した。氏の知識と熱意は、個人的な人間関係への温かさともまじりあって、UNBSSIの将来の活動において忘れられることなく引き継がれていくであろう。

(訳 谷川清隆)